

放送人の会

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階
Tel&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com
代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一

展望と展開 (ささやかにして大それた...)

今野 勉

当面、放送人の会はこうありたい、という私なりの望みは、そう大それたものではない。大それたことではないのに、実現はけっこう難しいということを、私も知っています。

何かと言いますと、会員の皆さんの会の行事への参加ということ。参加といっても、何か手伝えということではありません。とりあえず、いくつかある行事に顔を出してみませんか、ということ。

放送人の会は、年間、さまざまな事業(行事)をやっています。それらを通じて、一般視聴者や制作者や脚本家や俳優の皆さんや、さらには、海外の制作者などとの交流・情報交換・情報発信を行っています。

どのくらいの数、そうした事業(行事)をやっているか、といいますが、「名作の舞台裏」、年に三回、「人気番組メモリー」年に一回、「私のベスト番組」年に一回

「放送人の世界」年に一回(二日・三日)以上は、横浜の情報文化センター内のホールや放送ライブラリーで行われています。情文センターは、みなとみらい線の日本大通り駅の真上です。徒歩一分です。

「INTERBEE(インター・ビー)シンポジウム」年一回。

このシンポジウムは、幕張メッセで開催されます。

他に、会員むけの「ミニ・シンポ」(年に一回・二回)があります。

さらに、「日韓中制作者フォーラム」が三年に一度、東京で開催されます。(四日間)

ことしからは「ラジオ塾」や「俳句会」も話題になっております。

会報への投稿、寄稿も気軽にお寄せください。

特筆すべきは、放送人の会が選定する「放送人グランプリ」の授賞式と懇親会です。ご存知のように、この授賞式は、放送人の会の総会を兼ねて行われます。

放送人が選ぶ放送人への賞ということで、毎年、受賞者の親密かつ本音の挨拶が、参会者の心を打ってきました。

私自身、さまざまな授賞式に出席してきましたが、「放送人グランプリ」の受賞者の挨拶の感動を上まわる言葉に出会ったことがあります。きっと、仲間うちのことですので、飾らない言葉、本当の心情が現れるのだと思います。総会に出席するということは、その年のすぐれた放送人の言葉や業績や人柄に接することでもある、とうけとめて、是非、総会に参加して頂きたいものです。

その他に、随時「カレント・シンポジウム」も開かれます。その時々々の放送界の問題に合わせて、緊急に開催されるシン

ポジウムです。昨年は「放送の公共性とは何か」ホリエモンの問いかけたもの」を開き、大盛況でした。

こう見えますと、少ない年でも、年間十一日間、多い年ですと、十九日間、行事が行われることになりました。願わくは、そのうちの日でも二日でも、会員の皆さんに参加(出席)してもらおうことが私のささやかにしてかつ大きな望みなのです。

その他にも「放送人の証言」の自薦、他薦、あるいは収録の手伝い、事務局の電話対応など、参加して頂ければ有難いことがたくさんあります。

なぜ、会員の参加や交流が必要なのかと言いますと、それこそが会の存在意義を保証する根本だと考えるからです。いかなる展望・展開もその組織のメンバーに実感され、了解されていなければ成立しないのだと、私は思うのですが、いかがでしょうか。

まあ、そんなに肩肘張らなくても、参加してみれば、とても楽しいし、いろいろ知らなかったことを知るといって驚きもあるし、時には古い顔と出会えるかもしれないし、私自身は、そんな感じで、参加しています。

ことしから、地方局の会員の交流をネット上でやれないか、という構想も浮かんでいます。地方の会員の皆さんの参加も、何らかの形で実現したいと考えています。

激変する放送界にあつて、放送人の会の存在意義を確かなものにするために皆さんのご協力をお願いする次第です。

それぞれのプロジェクト・そのプロフィール

新代表幹事のもと新しい体制が動き出した。それぞれの担当責任者の弁を聞いた
自らが愉しく

事業委員長 石橋 冠

ひところより、会の事業や催事がふえてきました。どれもが自然発生的で、無理なく持続され、番組制作者と市民との交流が増幅されています。スゴイことです。このことこそ、真の「放送文化だ」と言えましよう。

いま各々のプロジェクトについては言及しませんが、どの会場でも参加したゲストや一般市民たちの充実感あふれる素敵な笑顔で終っています。

おそらく、放送に青春を賭けた諸兄の「放送への愛」が伝わり、過去を未来への礎にしようとするこの会の真意が理解されたからなのだと思います。

さらに「放送人の証言」は、すでに採録が百人を超えたときいています。いつか放送の生きた歴史を語るうえで、貴重な財産が積み重ねられていることに、興奮を禁じえません。

さて今般、私ごときが事業委員長を拝命し周章狼狽しましたが、引き受けたからには、できうる目標を置いて精進したいと思います。

目標のひとつは、現役の放送人たちのより緊密な交流を企てることです。彼らが渴望している組織を横断するネットワークを作つてあげ、それに力を貸し、

その先に放送人の会の新戦力を確保したいと考えます。具体的ないくつかの方法を思案中です。

もうひとつは、これこそ急務ですが、会員同志の交流をより活性化させ日常化することです。催事を利用するのもよし、そのための催事を作ることもよしです。提案なりアイデアをいただけたらと思います。

私は極端な下戸で、飲む席は遠慮をしていましたが、先日初めて催事のあとの飲み会に参加してみました。多士済々、談論風発、実に愉しく「ああ！これが放送人の会だ」と目からウロコでありました。今野代表幹事の古武士のような風貌にも「無理をせず、自らが愉しく」と書いてあるように見受けれます。同感です。

放送への愛を持続し、誰もやめてこなかった事業を愉しみ育てつつ、放送界のもうひとつのバックボーンとして成熟させたいものです。

「名作の舞台裏」

担当 荻野慶人

TVドラマも世につれ...にちがいはないが、主調や流行が移り変わるうと、いつまでも色あせない名作がある。

五年前(〇一年)の『岸辺のアルバム』『夢千代日記』から去る七月十五日の

『十二年間の嘘・ソープ嬢モモ子』までの十五回、横浜情報文化センター・ホールを観客は今ひとたびの感動で、窓外に望むみなとみらいが既に二十一世紀であることを忘れていた。

十一月四日(十六回)の『男たちの旅路』は初めて横浜を離れ、前橋市民文化会館で「第十五回全国ボランティアフェスティバルぐんま」に参加する。障害者連を描いた「車輪の一步」を鑑賞し、故人の鶴田浩二さんは無理として、山田太一(脚本)、斉藤とも子、斉藤洋介(出演)の諸兄姉が想い出を語り合う。司会は当会員の中村克史(演出)、コーディネートも会員の太田敬雄だ。

十一月二十三日(十七回)の『大地の子』は主演の上川隆也さんを招き、会員の岡崎栄と河村正一(制作)が登場、司会が私が務める。日中合作の不朽の秀作だけに訊ねたい秘話はあれやこれや抱えきれない上に、責任もまた重い。

十五回中九回も司会進行をはたした石橋冠事業委員長、このプロジェクトに新しく参加を願った堀川とんこう、鶴橋康夫、林健嗣の諸兄と、明年以降の企画立案の侃々諤々が始まっている。

研究シリーズ

「放送人の世界〜人と作品〜」

担当 今野 勉

「放送人の世界」は、いつとき、公開セミナーとして、一般視聴者むけの顔をみせたこともありましたが、「名作の舞台裏」や「人気番組メモリー」など、一般視聴者むけの他のシリーズと差別化

するために、2005年度から、初心に戻って、研究シリーズに特化しました。内容的に、少し踏み込んで、放送志望の学生や制作者や研究者にも興味を持つてもらえるようなものにしたいと思っています。もちろん、一般の視聴者も大歓迎です。

これまで、さまざまの視点から「放送人」を選んできましたが、まだ取り上げていないのが、ラジオの世界の放送人です。佐々木昭一郎さんの回の時、二本だけ、佐々木さんのラジオ時代の作品を取り上げたことはありますが、ラジオ番組だけ取り上げるといのは、まだやったことがありません。

幹事の中にも、ラジオ番組を制作した経験者がいます。松尾羊一さん、久野浩平さん、斉明寺以玖子さんなどです。そうした人や石井彰さんなどと相談して、どのような企画なら成立するか、これから考えていきます。

何か良いアイデアがあつたらお聞かせ下さい。日程は例年通り、来年の二月か三月、二〜三日間です。

「人気番組メモリー」

私の選ぶベスト番組

担当 大山勝美

現在の情報・報道系番組の氾濫は、時代のトレンド、視聴者のニーズの高まりのためでしょうが、何といつてもテレビ朝日『久米宏とニュースステーション』が衝撃的契機になったことは否定できないでしょう。

前々回の『放送人グランプリ』もその画期的成果Vにたいして優秀賞を贈っています。その『ニュースステーション』

をとりあげ、十二月に開催しようと計画
中です。

メンバーは、番組をたちあげた会員で
もある小田久栄門さん、若林正人さん、
ANB『スーパーモーニング』の渡辺真
理アナを中心に、鋭意調整中です。

「私の選ぶベスト番組」は、日本の代
表的演出家・吉田直哉(NHK)さんに
「登場願えぬかと考えています。ひと頃
まで、病気が原因で声が出なく、
と遠慮されていたのが、今はすっかり声
も戻っていらつしやるので、「ぜひ」と
交渉中であります。

「INTERBEE」

担当 齊明寺以玖子

公開シンポ第9回「放送とインターネット
トクジャーナリズムの未来を担うもの
は誰か・Part2」

恒例国際放送機器展の場を借り放送
現場人が創り手の本音を吐露するパネ
ルディスカッションは来る十一月十六
日(木)午後三時～五時半幕張メッセ(丁
R京葉線海浜幕張駅下車)国際会議場二
階で開催します。

今年も、「文化としての放送」の存亡
を決する刻の到来を予感する。大山勝
美特別顧問の緒言に始まり、演出家作家
として現状に強い危機感を抱くベスト
セラー『テレビの嘘を見破る』著者・今
野勉代表幹事の司会の下、日本人初のビ
デオジャーナリストで一九九四年来国

内外の放送局に映像リポート・ドキュメ
ンタリーを提供し、九九年からはニュー
ス専門インターネット放送局ビデオニ
ュース・ドットコムを主宰する神保哲生
氏が前回に引続き登壇、民放草創期から
各ジャンル番組を誕生させ、今は歴史の
記憶を民衆の目線から記録し続ける

吉永春子(現代センター)会員、放送と
インターネットは対立的・相互補完的。
一方が一方を包摂する。何れの関係に
あるのかを熟考するべくテクノロジ
の不可逆的变化に伴うジャーナリズム
の変容にアメリカ支局長当時の実例を
あげて肉迫する真の報道マン金平茂紀
(TBS)幹事ともども、表題を巡って

先ず各自の持論を発表、一巡後は自由
白熱の討議を繰り展げます。来場者との
質疑にも時間を割く予定。
ブログが世論総代であり得るかの如き
風潮の喧しい今日、挙って会場に足を運
び、ブロードキャストイング・クリエ
イター或いはその良き理解者たるご自分
の足元と行く手を見極めて下さること
を心から願っています(入場無料、入口
で要登録)。

「地域交流」

担当 中澤忠正

ローカル局というのは、真ん中から
放射状に広がるカラカサの骨のような
シカケの先端に位置づけられる。真ん
中がキー局。骨の一本一本はキツチリ
削り上げた強力な竹棒だが、横のつな

がりはかすかな細い糸だけ。

日本の放送行政は過去に二つの決定
的なマチガイを犯したことで、ローカ
ル局の存続を危うくしている。

一つはガチガチの地域免許主義に凝
り固まったこと。(その結果ネットワ
ークが健全に生育せず、その間隙に押
し入った新聞資本が放送を牛耳る結果
に：：と、これは重大問題なのが、こ
れ以上ここでは触れない。)もう一つ
は、ネットワークを敵視しておきなが
ら四波化の愚挙を推し進めてローカル
局を「受け局」に貶めたこと。

そこへデジの責め苦で、ローカル
局は今や氣息奄々。打つ手がない！
しかし、ない！と言っているのは始ま
らない。ここで放送人の会の出番があ
る、かもしれない、のです、マジ。こ
ういう時こそ飛躍した発想が必要な
だが、それこそが我々の得意ワザ。

まずは、横のつながりの細い糸を手
繰り寄せて、飛躍した発想をからみ合
わせてみようじゃないかと、これが
地域交流プロジェクトの精神です。そ
れなら我々が素手でやれる、と。

「会員交流」

兼任担当 中澤忠正

放送人の会というのは、さまざま
立場で「放送」の仕事に打ち込んでき
た人たちの任意の集まりである。なん
の義務も責任もない。あるものといえ
ば会員それぞれの「志」のみ。

にもかかわらず、というか、それだ
からこそというべきか、カネも人手も
ないのに結構いろいろやっている。

強いていうとその「志」が個々バラ
バラで、1+1が2に留まっていると
いう無念さではないか。メンバーはみ
な優れた何モノかを脳みそに深く蔵
しているのだから、それを混ぜて仕込
んで発酵させたら、1+1が3にも5
にもなるのじゃないか？

メンバーに年寄りが多いのは事実だ
が、いい酒をつくれる杜氏は昔から年
寄りときまつたものだ。

会員交流というプロジェクトチ
ームに期待されているのは、会員がぶらり
と集まって、変わった発想や恐るべき
経験などを一つの桶に勝手にぶちこん
で、アツと言わせる芳醇な酒を醸して
みたいってことじゃないか。

それには毎回一人の酵母役を仕立て
て漠然とながらテーマを決め、できた
ら呼び水の酒も用意し、うむ：：その
手だな。新しい「番組」なんてたい
い竹林の清談、というかヘンチクリ
ンな雑談の中から生まれたもんだ。

「放送人の証言」のこれから

担当 各務 孝

「放送人の証言」も七年がかりで念
願？の100の舞台にのつたが、今後の
目標としてどこに基軸を置くべきかに
ついては、証言担当者の顔触れが多彩に
なったこともあらず、議論百出の有様

である。

証言者の記憶の不確かさや思い違いをそのままにして、放送史の一次資料に耐えうるのか？とは言い難い、その検証を誰の手でどうやって行うのか。はたまた、現在、諸般の事情からドラマ系の証言者が三分の一強を占めているが他のジャンル、音楽、ヴァリエター、クイズ、スポーツ、報道、トーク番組などの証言が少なすぎはしないか、等々、議論は尽きない。ただ、いささか、独断と偏見に満ちた私見によれば、「証言」は何も、放送史の一翼を担わせることに主眼があるのではなく、それぞれの分野でパイオニアとしての仕事をしてくられた諸先輩、同僚たちの放送に賭けてきた意気込みのようなものを肉声を通じて、残しておきたいといった点にこそ重点がおかされるべきと理解している。こうした観点から、今後も放送史上の意義などに拘ることなく、会員諸兄弟の個人的興味、関心の趣くままに、この人に、こんな話を（それがご本人であっても可）といった類のご提案をお待ちする次第である。

「日韓中テレビ制作者フォーラム2006」

担当 山田 尚

暑くてうんざりした夏も、通り去ってしまいいそうになると、一抹の寂しさも感じます。少し慌てて振り返りますが、去っていくものの足は速くて。速さといえ、時間の経ち方も、その

スピードを変えます。ある目標点や状況があるとすれば、そこへ向かうその時間のスピードは、離れている時は遅く、近づくと従って加速度的に速くなる、ようです。ゆっくりと時間が流れていたはずの3〜4ヶ月前から、いまや、あっという間に時は通り過ぎていく。

日韓中テレビ制作者フォーラム、当事者の今の状況。

昨年の東京大会から、もう十一ヶ月近くが経ちました。

昨年の今頃は、きつと、もつと時間が経つのが速かっただろうし、現在の韓国の関係者は、そのとき以上の時間の経つ速さを感じているに違いありません。その一方、時間の早さの中で、まだかまだかと待っている時間は、これはまた、遅く長く感じて・・・。

実は、韓国へ送るべき素材等が、予定より結構遅れました。加速度はついてしまつたが、時間よ、止まれ・・・。韓国の皆さん、申し訳ない。

「日韓中テレビ制作者フォーラム」は、今年、韓国・光州市に新しくできた、金大中コンベンションセンターが会場。今回のテーマは、「調和」と、文化、環境」です。

いささか抽象的、総花的に見えますが、いろいろ意見が出た中で、これこそ3か国の「調和」の結果なのです。

参加作品は、ドキュメンタリー、ドラマ、エンタテイメントの3ジャンルに各国2作品づつ、合計18作品。他に韓国の一般の人たちにも見てもらう特別参考作品や共同制作作品等もあり、しかも、

今回から、参加作品にたいして、審査を行い、賞も授与することになっているはず。元氣な韓国、大会運営に期待しましょう。こちら日本は、東京、大阪、名古屋。

鶴沼海岸から 21

名誉会長 川口幹夫

人生の終章

旧制第三高等学校の寮歌のひとつに「行春哀歌」という曲がある。

静かに来たれなつかしき
友よ憂いの手をとらむ

くもりて光る汝が瞳に
暮れゆく若き日は歎く

嗚呼玉杯に花うけて、という歌を代表として旧制高校の寮歌は国を憂い、世を歎く調子のものが多かった。

昭和十九年の入学だから、大戦の最中だ。そこでこの歌に会ったのだから、シヨックはおおきかった。

戦争が終つて学校に帰つた時は、時代は大きく変わっていた。

戦争で人を殺す必要もなかった。よりよき人生を人はどう生きるか。それだけを考えていけばよかった。

新しいテレビという媒体をどう生かしてゆけばいいのか？それだけが私たちの最大の命題になった。そして、六十年の歳月が流れた。

屋、九州からの多くの制作者を含め三十名を超える大デレゲーションで乗り込みます。

想像もしてなかったことが起こつた。いつのまにかテレビは世の中の中心になつていた。中心になつただけに、その影響も極めて大きくなつていた。評価も上げた。しかし、批判の嵐も容赦なかった。

二十代の若かつた私も、いつのまにか年をとつていた。一緒に歩いた友も次々と欠けて行つた。妻も逝つてしまつて早くも十三回忌を迎える。

ことしでカケネなしの八十歳だ。すっかり老化してしまつた肉體。そして忘却の彼方へと消えてしまつた頭腦。六十の坂も七十の坂も越えてきたが、どうやら前途に立ちほだかる坂はこれまでと違ふ。

八十にあと数歩のところまで来て今、私はしみじみと思う・・・

若い日、私の敬愛した長友の一人はよく言った。「川口君、人生は坂だらけよ。でも、一番ギョツとするのは『マサカ』だよ」と。

たしかにいくつかの「マサカ？」にも会つた。でもそれも越えた。八十の坂を越えると、いよいよ人生の終章だ。

一生懸命に奏でてきた人生交響曲。あまり派手ではない。しかし、きちんとしたコーダをつけて終わりたい。

名作の舞台裏

名作の舞台裏スペシャル版

久世光彦さんを偲んで

連続ドラマ『寺内貫太郎一家』

ゲスト 小林亜星 浅田美代子

金子成人 (脚本)

司会 大山勝美

主催 放送番組センター 放送人の会

於 6月9日 横浜情文ホール



ゲスト出演の浅田美代子さん

放送ライブラリーの「久世光彦展」に連動した企画で、当日は故人の百ヶ日法要にも当たり、満員の会場には久世さんの世界を愛したファンの中に奥様をはじめ久世家の方々、向田邦子さんの妹和子さんも来席、製作会社KANA NOXのスタッフも集まり通常の「舞台裏」とはおもむきを異にした故人を偲ぶ手向けのセミナーとなった。

まず、社会派や芸術派の実験的な時代を経てテレビ一千万人口に入り、連続ドラマと茶の間を結ぶドラマのTBSを確立。舌足らずなリアリズム手法とは無縁な久世ドラマの成立を先輩として見つめていた大山が、映画ともちがうテレビ演出の自立の中で特異な光芒を放った背景に触れる。

例えば演技では素人の小林亜星を主役に抜擢した経緯など本人から聞き出した。いまでこそアイドル起用は当たり前だが浅田美代子に「演技以前演技以後」の不思議な存在感で茶の間の支持を得たことなど、脇から見ていた当事者の大山でなければといった裏話の山で会場は沸く。

また、久世ドラマ後半の「向田邦子新春スペシャル」シリーズの大半を脚色の域を越え、埋もれた「昭和戦前」ひいては「昭和」という長い時代にひそむ情念の時代史の再現を久世と構想したと、金子成人は脚本家の立場から故人を語った。会場は各世代のコアファンで埋まったのが印象的だった。

第15回 名作の舞台裏

第37回芸術祭優秀賞受賞作品

『十二年間の嘘と乳と蜜の流れる地よ』

ゲスト 竹下景子 小野武彦

市川森一 (脚本)

堀川とんこう (演出)

司会 石橋 冠

於 7月15日 (横浜情文ホール)

今回はかつて「お嫁さんにしたい女優ナンバーワン」という人気を得た当時清純派の女優竹下景子さんが「汚れ役」に挑んで評判を呼んだ作品。

ソープ嬢のモモ子を買った宅地に見知らぬ男が掃除していた。その土地は元の所有者(佐藤慶)が、投機に失敗し、借金返済でとくに手放したものだ。気の弱い男は家族にバレるのを恐れて家族には十二年間も嘘をつき通していたのだ。そのモモ子が帰るとヒモ取りの男が部屋で殺されていた。モモ子は容疑者にされる。男の嘘がもつとで引き起こされる悲喜劇は、犯人捜しの域をこえ、小市民的幸福感のせつなさ、非情さに迫る。24年も前のドラマ

ゲスト出演

「モモ子」役の

竹下景子さん



脚本を書いた

市川森一さん



マがバブル期から今日にいたる現代社会の疎外感を予言し、古めかしいドラマではない。傑作のゆえんだ。

投げやりな態度の中に清らかな心をもつ愛すべきモモ子を好演した竹下がその背景を語り、堀川とんこうは風俗ドラマの装いが結果、行き詰まった社会派的手法を脱皮したという。

市川森一は、当時は演出家と脚本家が緊張感をもって作っていたという。ドラマは作り手と見る側がある種の共犯関係によって成り立つもので、良質なドラマファンなくしては傑作もまた生まれないという。司会(石橋)の軽妙な手引きで展開し、刑事役で出演していた小野武彦も脇役の微妙な役作りに触れ、興味深いものがあつた。

会員だより

・鶴橋康夫さん 映画『愛の流刑地』脚本・監督で制作中(配給 東宝)
主演 豊川悦司 寺島しのぶ

愛の極限状況にかける男女を凝視する映像表現はテレビを拒否する……

(注) モノスゴイ作品になりそう)

・石橋 冠さん 「小生、『マグロ』(テレビ朝日)という5時間ドラマの演出に取り組み(主演 渡哲也 天海祐希)ほとんど青森県下北大間港のマグロ漁の撮影、しばらくの間、津軽海峡と格闘しています」

ラジオの広場

構成 石井彰

埋もれた音を求めて

青森放送 渡辺英彦

私が担当する『あおもりTODAY』（月々金13.30〜17.00）というラジオワイドでも定期的に民謡を特集している。「民謡の先達をたずねる」と言うサブタイトルで、津軽や南部民謡で大きな足跡を残した民謡芸人を、弟子や家族、民謡研究者などの証言を集め、局が所蔵している本人の唄や演奏を交えながら立体的にその人となりを紹介しようとして試みている。

昨年と今年2回にわたって成田雲竹（明治21年〜昭和49年）を取り上げた。津軽出身の唄い手で日本民謡協会から初代民謡名人の称号を与えられた人である。唄の名人だけでなく、民謡の採録、編曲、作曲にも腐心し、自作の津軽民謡はいまでも多く歌い継がれている。また雲竹は高橋竹山の才能を発見し、竹山の芸名を与えた人でもあった。

雲竹と竹山が活躍していた昭和20年代から30年代頃までは民謡の師匠と弟子の関係、唄い手と三味線伴奏者の関係は、今では想像もできないほど、厳然たる上下関係があった。唄い手が格上なのである。厳しい師弟関係の中で竹山の三味線芸は高められていった。雲竹は厳しく接しながらも竹山の芸を深く認め、竹山以外の伴奏者で唄を披露することはほとんどなかったという。番組では雲竹と竹山がお互いを語り

合う声がせひとも必要だった。資料室でテープを捜したが競演はいくらでもあるが、肉声でお互いを語り合っている残されていない。公の場で師匠と弟子が対等に語り合うようなことはほとんどなかったのである。

番組のレギュラー出演者でもある元青森放送プロデューサーで民謡研究者の松木宏泰さんに尋ねたところ、ラジオ放送で唯一演奏以外で一緒に出演している番組があり、そのテープをもっているという。たしかにそこには師匠雲竹の前で遠慮がちに語る竹山がいた。番組は、この一分足らずの音声、雲竹の弟子の証言、人知れず立つ雲竹の石碑からの中継、競演の音をはきみ、二人の肖像にせまった。「雲竹の唄に伴奏をつけられるのは竹山だけ」とお互いが思いつつも人生の軋轢を迎え、葛藤を深めてゆく二人が一部分ではあるが描けたのではないかと思う。

放送局には多くの過去の音声、映像を所蔵している。宝の山だ。それを発掘し、あらたなドラマを紡ぐ事も、われわれ中堅・若手放送人の役割だと思う。そのためには私たちは宝の山を知る。「放送の先達を訪ねる」事も忘れてはならないと思う。

◇ 思い付きがラジオ…

福井放送ラジオセンター部長

福本実

「知恵を絞って新企画を考えろ！」と上司から撒が飛んだとしても、無い知恵絞ったって旨い汁が出るわけありません。うーんと唸って脂汗が出るくらいなもの。でも、実現可能かどうか

か判らない「思い付き」は、何となく浮かぶものです。無責任に思い浮かんだモノを番組にするのは知恵じゃやなくて、即やってみよう！決断の速さでしよう。その昔、レコード室にマイクを引き込み、アナウンサーがリクエスト曲探しで格闘する『たった一人のリクエスト』や、一般家庭をスタジオにして茶の間からワイド番組を流す、題して『あなたのお宅からワイドやります』などなど。

以下はどう考えてもラジオ向きじゃない思い付きが番組に化けたお話…今年5月放送の『明治人物伝 魅惑の奇術師 松旭斎天一』がそれ。

「ラジオで手品って出来るかなあ」という思い付きに担当ディレクターは無然として「ラジオじゃ無理無理、あ、赤いハンカチが一瞬にして青いハンカチに変わりました！って実況でもするんですか？」「それ、いいじゃん」「ええッ、マジですか」

福井出身で明治時代に大活躍した勝旭斎天一の録音構成です。当時単なる寄席芸に過ぎなかった奇術（手妻と称したらしい）を劇場で公演した人物です。当局の許可を得るために、浅草文楽座を寄席風にその時だけ文楽亭と改称しての挑戦でした。

この、文楽亭公演での奇術を「マジに」実況中継の手法で再現してしまいました。当時のことを研究している専門家のインタビュー構成で伝えるのが常套手段でしょうが、今回は実況中継解説者として登場させました。これが妙にイキイキとしていて面白く、目の前に情景が浮かんでくるんです。大成功！だと思っています。

こんなケースもありました。ある日一通のハガキがきました。「家に昔のSPレコードが沢山ありますが、プレーヤーも針もありません。FBC（福井放送）で聴かせてもらえませんか」「それはちょっと無理ですねえ」と担当者。「いや、逆にラジオでよびかけちゃえば。聴きたいSP盤持ってきてくださあーいって。番組でおかけします！からって」

またまた思い付きです。でも翌日のFBC受付に昔のレコードをかかえたりスナーが続々やってきて、いつもと違う楽しいワイド番組になりました。

それはSPレコードに刻まれた音楽以上に、大切に保存していた人たちの思い出がたくさん刻まれていたからです。もちろんレコード持参の方々にはスタジオに入ってもらい、番組にも出たいただきました。

FBCにラジオセンターが出来て4年目。センターのゼネラルマネージャーである弊社の社長は「変わったことやってみる、やってみて駄目だったらやり直せばいい」

その一言があるからこそ、気楽な「思い付き」を実現できるのです。

◇ 上原直彦さんの受賞パーティー

ラジオ部会 石井彰

琉球放送パーソナリティー上原直彦さんの放送人グランプリ受賞祝賀会が6月13日、沖縄ハービービューホテルで開かれた。

上原さんは四十年以上にわたり琉球放送ラジオで、ウチナーグチ（沖縄語）で語る生ワイド番組『民謡で今日拝なびら』（月々金15.00〜16.00放送）を

続けている。また毎年3月4日に沖繩だけでなく世界で一斉に三絃（沖繩三味線）を、ラジオの時報に合わせ奏でる『さんしんの日』を続けてきた功績で第5回放送人グランプリを受賞。

会場の「彩海の間」には、全島の放送や新聞のマスコミ関係、琉球民謡・舞踊界の幅広い友人・知人など五百人あまり、立錫の余地もなく、ステージ下に飾られた放送人グランプリのトロフィーと賞状を多くの人びとが眺めていた。琉球放送会長の挨拶から始まった祝賀会は、芥川賞作家の大城立裕さん、そして沖繩芸能史・風俗史研究家の崎間麗進さんへと続いていく。崎間さんは、琉球放送で上原さんと対談する番組『ふるさとの古典』を17年あまり続けている。崎間さんはほとんどウチナーグチで挨拶され場内は大爆笑だった。どうやら崎間さんは「上原さんの放送人グランプリの受賞理由の中に、なぜ自分とやっていると『ふるさとの古典』が入っていないのか」と、楽しく文句を述べていたらしい。

続いて琉球放送ラジオの制作者たちが、琉球舞踊と三絃の演奏を披露したが、これが見事だった。上原さんの番組を支えるスタッフが琉球舞踊と三絃を心から愛してる姿がまざまざと感じられた。ここに上原さんの番組が長い間多くの人々に愛されている、もう一つの理由があるように思った。

沖繩の人たちが、上原さんのグランプリ受賞を心からお祝いしている光景を見て、上原さんを放送人グランプリに選んで良かったなと思う。各地で素晴らしい放送活動を続けている放送人に光をあてていきたいと改めて思う、楽しい宴の夜だった。

（第5回放送人グランプリ審査委員）

ラジオフォーラム

☆ギヤラクシー賞入賞作品を聴いて語り合う会

日時 10月28日(土) 13:00~17:00
於 イマジンスタジオ

(ニッポン放送 B2F)

『僕たちの高田渡』(LF 作品)

『ラジオ一人芝居』最後の初年兵』

(エフエム福岡 作品)

ゲスト 小室 等ほか

☆ラジオの会・制作者セミナー

日時 11月26日(日)

会場 JFNセンター 3F大会議室

講師 木村成忠(東北放送常務)

田中美登里(TOKYO FM 編成制作CP)

主催 ラジオの会 協賛 放送人の会

◇ ◇

以上のように小集団の集まりでラジオとは何かをあらためて問い直す催しが注目されています。ご存じのようにラジオは今、大きな曲がり角にたっています。デジタル化問題をいかに乗り越えるか、それもありますが、生一辺倒に硬直したラジオをパッケージ(コンテンツ)の見直しで再生を図れないか、「テレビを聴く」「ラジオを見る」といった迷走下の五官を逆にピンチではなく、チャンスとする試みもあってよさそうです。「ラジオの広場」はラジオ(A・M・F・M・コミュニティラジオ)の動向や制作現場の情報などを中心にミニ特集でまとめる欄です。ラジオ放送人の参加を期待しております。

(ラジオ部会)

保存脚本をどうしますか？

放送作家協会の提案をめぐって

九月二十一日、事務局に放送作家協会理事長の市川森一氏、水原明、南川泰三両理事ほか香取俊介、高谷信之、津川泉、石橋映里、馬場絵麻(日本脚本アーカイブス準備室)の方々が事務局を訪ねられました。まず、放送作家協会が精力的に進めているテレビ・ラジオの脚本、台本の収集・保存、将来構想として「日本脚本アーカイブス」の設立をめざし、関連諸団体に協力をお願いしたいという趣旨でした。かねがね当会も放送関連の諸団体との提携、交歓をめざし、放送界センターサロンの構想を持つものであり、文化遺産としての脚本保存、利用の運動は制作者団体としても大いに協力したいところです。

脚本・台本、とくにVTR保存以前のそれは放送史的に貴重な第一級資料です。しかしその散逸は目に余るものがあり、さなだに高齢者会員にとっては気になるところと推察します。

つくづくと台本の山眺むれど

冥土の旅に無用なるべし

ふと身辺整理など考える歳となり、残った家族は蔵書、台本、ガラクタをどうするか。「燃えないゴミ」扱いにされるか、さてさて……

個々には放送ライブラリーや、例えば早大演劇、各大学の演劇・メディア科、演劇・演芸諸団体などで細々と収集しております。また、ネット・オークションや古本屋

で台本が好事家たちに高値で売られ、その私物化、商品化の傾向がみられます。

公共の文化遺産として確保・保存(特に創成期や60、70年代)する必要があるとす。協会側の提案(趣意書「日本脚本アーカイブス調査研究報告書」作家協会編は事務局にあります)の問題点、例えば保存と利用の運営方法、権利問題、寄贈契約や郵送費など、さしあたりうかんだ懸案事項についてQ&A的に懇談しました。

脚本・台本の類いはPや演出家以外に案外照明や音効、美術関連の担当スタッフが丁寧に保存しているものです。タンスの肥やし→燃えないゴミ直行の悲劇を避け、将来の放送文化へ架橋し、放送II送りっぱなしで霧散させることなく、放送文化の一翼を考へることも肝要かと思えます。

【出席者】今野勉、大山勝美、荻野慶人、石井清司、北村充史、鈴木典之、松尾羊一
なお、くわしくは日本脚本アーカイブス準備室 足立区千住5・13・5 ㉒388
2・1071 もしくは日本放送作家協会 港区六本木6・2・5 ㉒3404・67
61へお問い合わせください。(記・松尾)

新会員を募集しています

身近にお心当たりの方がおられましたら、事務局まで(う)一報……

久野 浩平

今回は教育、教養、生活などの番組で活躍した方々の「証言」を集めました。

まず新井和子さん。新井さんが放送と関わりを持ったのは戦後すぐタイピストとしてCIEで働いていた時でした。日比谷のNHK本館の四階を占領していたCIEは放送技術の講習を始め、新井さんはそれを傍聴できたのです。講和条約後、新井さんは開局直後のラジオ東京(現TBS)に入社、制作部を経て一九五三年社会部へ移動。「物語日本女性史」「婦人の窓」「ラジオスケッチ」などを担当しました。新井さんはデンスケを抱えて、特に女性の意見を聞き伝えることに放送の意義を見出します。お手伝いさんたちの集会の取材、ローカル局の女性制作者たちと連携した共同制作グループ「土曜会」の結成、そこから生まれた「ボタ山の子供たち」のキャンペーン、新井さんの「証言」は民放ラジオ初期の夢のような活気を伝えます。

「男の三倍働いてニッコリ笑ってなくちゃ駄目なんだっていうのが合言葉でしたからね。そのニッコリっていうのがどうしてかという、男の三倍働くのはそりゃ当たり前前、つまり足をとられないためにね(中略)だけど男とみんな同じみたいになつたらつまらないからニッコリ笑わなくちゃ駄目だっというの。生意気ですね(笑)」

香川宏さんは五十四年NHK入局、地方勤務を志望、山形局でラジオプロデューサ

になり。財布の全てを姑に握られ自由になる金は一銭も持てない当時の農家の嫁の状況を描いた「嫁の小遣い」を作る過程で録音構成の方法論について大きな啓示を得たと香川さんは語ります。二年後AK婦人部に移動、五十七年の終戦記念特番「日本人の良心」を初めラジオドキュメンタリーに専念します。六十一年からはテレビに移り、「テレビ・婦人の新聞」を担当、六十四年、人間を追及する心象ドキュメントのシリーズ「ある人生」を開始、ラジオが原点の香川さんは徹底して音と映像の同録にこだわります。原爆症詩人の記録「耳鳴り」、障害者のコミュニケーションの多様性を主題にした「聾哑夫婦の記録」、岩手県の或る農村に着目した「戦没農民兵士の記録」など数々の話題作の制作経験語る香川さんの「証言」は優れたドキュメンタリー論でもあります。

「ラジオの体験っていうかな、やっぱりこれはね、感性を養うだけじゃなくてね、人間の本質を謙虚に受け止める、そういう人材を養うね、僕は苗床だと思ってる。だからテレビをやる人もね、本来は先ずねラジオを、今でもそうだと思うんですよ」

末次操子さんは京都日日新聞、中央公論、読売新聞(大阪)の婦人記者を経て、五十八年開局直前のYTVに入社。「教育・教養番組を山のように」作るようになります。「奥様自動車読本」「村山りう源氏物語」「テレビと共に育せましよう」「巨泉まとめて百万円」等々。モルガンお雪、林美美子、松下幸之助、桑原武夫、中村雁治郎等々。直木賞を受けたばかりの司馬遼太郎さんは番組の司会を引き受け、「証言」に何度

も登場します。六十年、島津久永、貴子夫妻の新婚旅行を関西汽船の船中から生中継した力業、「あなたの夢買います」で勝新太郎のひげを剃りたい床屋の夢を叶えたり、力道山に空手チョップを習いたい小学生の夢を実現させたりした大胆な企画と発想は驚くばかりです。

「教育・教養はもうケチなお金で仕事をしなきゃいけないから、みんないじめられた。だから反撥精神がすごくあって結束も固かったわけ。もう負けてなるものかと。まあ私もそうだけど、だからどんなにみんながよく仕事をしてくれたかっていうことを感じますね」

近藤廣弘さんは松屋デパート勤務のあと五十九年NHK入局。テレビ教育幼児文化班に配属されます。間もなく始まった「お母さんといっしょ」にアシスタントとして参加、以来幼児番組は近藤さんの終生の仕事になりました。翌年「お母さんといっしょ」は帯番組になり「プーフーウー」が登場。「証言」では単なる人形劇ではなく、真のアニメーションを生放送で実現しようとした飯沢匡さんの厳格な制作の姿が語られます。近藤さんは六十四年CKに転動しますが、七十年にはAKに戻り「うたのえほん」などの青少年番組を担当、七十七年からは幼児番組のCPを勤め続けました。幼児番組の特質を語る近藤さんの「証言」は大変興味深いものです。

「幼児番組の」三十分が二歳にとつては大人が一日テレビで見るに匹敵する三十分だと思っんです。で、その中に、ドキュメンタリーとか実用番組とかニュースとかいろいろなものがあったっていいんじゃない

いか、と。ただそれを、二歳の子供に見せるドキュメンタリーとは何かとを、それは考えなきゃ。」

最後は川野橋己さんです。川野さんは五十二年AKの放送効果団に入団。数々のラジオドラマやドキュメンタリーで音響効果を担当しました。六十三年職員として入局。ラジオドキュメンタリー「現代に生きる」のプロデューサーとして自分で取材し自分で構成する楽しさを知ることになります。六十五年、盲学校の子供たちの生活をまとめた「眼から手が出る」で芸術祭奨励賞を受賞、その縁もあり「盲人の時間」を担当、退職するまで二十五年間に千二百本の番組を作り続けました。川野さんの「証言」では当然この障害者向け番組の企画、技術面に亘る様々な問題点が中心になりますが、その経験から生まれた「警女」や「琵琶盲僧」に取材したドキュメンタリー、更には「竹の音」「絹の音」「金子みすずの世界」など自然、絵画、詩の美しさを音だけで表現しようとする芸術的挑戦の話題は、音響にこだわり続ける効果マン出身の面目躍如と言えます。

「音の世界、音だけの世界というのはいわば映像のない世界で、聞いて頂いている方も当然映像を持ってない世界の方ですから、非常にある意味では、あのう、理解して頂けたですね。コメント一言書くにしてもですね、ほんとにあの、情景が浮かんでくるということをよく言って貰いましたけども、これもやっぱり効果時代に培ったですね、音で表現する、しなきゃいけないという意識ですね」

連載随想

題名のないエッセイ 第三回

（身売りされた番組が四十年も）

磯村 健二

私が放送に携る以前にNHKを中心に活躍された大先輩「堀内敬三」「上浪渡」のことを書かせていただいたのには理由がある。音楽番組と一口に言っても色々で、ポピュラー、演歌、ロックなど視聴者の支持層が厚いものから、邦楽、クラシックのように言わば教養畑に分類されてしまふものもある。私は民放在籍約四十年間の内、九割方その後者の担当を仰せつかってしまったのである。そして約三十年近く「題名のない音楽会」という不思議な番組の創世記から、A.D.、D.、Pと体験することになる。（勿論、この番組だけ担当していたわけではないが）NHKですら、クラシック番組の担当部署は特殊××と呼ばれた位で、民放でクラシックと言えれば編成や営業のメノカタキとされた。よりよって私が何故そこに長居をしてしまったのか？この際、数十年間の音楽番組の裏面史を教回に分けて語ることにする。

当時の日本教育テレビ（現テレビ朝日）に私が入社したのは昭和四十一年、一九六六年の四月であった。高校、大学時代に先輩達が開拓した「TVドラマ」や「ドキュメンタリー」の世界に憧れ、高度経済成長が止まった戦後初の就職難の年に何とか放送局にすべりこみ、希望に胸膨らませていたわけである。ところが、入社直後とんでもない事件が勃発したのである。東京十二チャンネルの倒産だ。当時、NETと同

様に所謂教育専門局として認可を受けていた科学技術庁財団が経営破綻を起し、別資本で再スタートをすることになったのが私の入社した四月であった。

演出部長と呼ばれ、うさんくさそうにシロジロ見られながら「君はうわさによるとオーケストラの楽譜を読んだり、作曲をしたりするそうだが本当か？」

幼児期から楽隊が好きでチンドン屋の後を付回したり、入社のつい直前までコンサートバスと指揮棒を持って全国のアマチュア・オーケストラの中を飛び回っていた私は「ハイ、多少は」とうっかり元氣良く返事をしてしまったのである。この瞬間、私のテレビの制作者としての夢はあえなくついでたのである。部長は「この度、わが社で『題名のない音楽会』という番組を制作・放送する。君はそのスタッフに入れ！」

問答無用で部長席を離れた私は何が起こったのか全く理解できなかった。勿論、その番組のことは良く知っており、十二チャンネルが約一年半前の一九六四年、東京オリンピックの年の八月、新進気鋭の作曲家、黛敏郎と名指揮者・石丸寛のコンビでスタートした番組であること。学生時代、公開録音の会場にもぐりこんだり、知り合の音楽家の楽屋に遊びに行ったりしていたからである。

十二チャンネルは再建にあたり、身辺整理のため数少ないスポンサー番組を他の民放に身売りし、里子に出すことを画策していたのであった。民放でも前代未聞の運命を辿った番組と私の出会いの一瞬である。（つづく）

テレビ裏方創世記 ⑤ 最終回

橋本 潔

「テレスタ」テレビスタジオの平面図を作成した。とにかく狭い。スタジオの半分は天井が低く、空きスペースでしかない。実際にセットを飾れるスペースは11メートルに7メートル。そして空きスペースとの間には1メートル近い幅の太い柱がある。2台のカメラには太くて重いケーブルが副調整室の下から長く伸びて繋がっている。2台のカメラがそれぞれのボジションに静止したままならともかく、2台が番組進行とともに動くとなると、太い柱の存在がケーブル捌きを困難にする。セットを飾るには狭いという条件に加えてこの問題をクリアすることが必須となる。

「テレスタ」に続いて、3階のラジオ「第2スタジオ」がテレビ専用の「2スタ」に改造された。間口9メートル、奥行き14メートル、高さ8メートル。3方の壁面に沿ってグレイのホリゾン幕、セピア幕が吊り下げられ、照明バトンのほかに3本の美術パトンを設置された。ミキシングルームにはスイッチャー卓、カメラ調整卓、調光卓が細長い室内にレイアウトされていた。しかし、このスタジオも大問題を抱えていた。入り口が一つ、ラジオの防音ドアのまま、2メートル×2メートルの開口部なので、この広さで搬入可能な大きさのものしか搬入できない。その上、このスタジオに大道具を搬入の場合は、1階南口の職員通用口から通路を抜け、階段室を何回も曲がりながら3階へのコースをたどる。ス

タジオ完成時、新しく技研で完成したイメージオルシコンの搬入作業では、曲がり階段で誤ってその梱包箱を地下まで落下させるという極秘の事態も発生した。その後2スタでは狭いドアから大道具を搬出させるために張物をかわす際、カメラの1台を転倒させるという事故もあった。

このほかラジオの「第1スタジオ」からラジオ番組を生中継するという「RTV同時送出」という方式も考えられた。三つのそれぞれのスタジオ条件とその対応の仕方がすべて異なるというなかで、半年後の本放送に向かって実用化試験局としての実験放送を始めることになった。

テレビ50周年の年に、沖繩放送局から当時の放送台本のコピーが送られてきた。その表紙には

「沖繩舞踊」

昭和27年9月5日（金）午後3・00

4・00

企画演出・樋口徹也、構成・荒井憲太郎とあった。

その余白にはN.Nagayamaのサインが記されていた。当時の番組研究班長永山弘さんの筆跡だった。この東京本部で見つかった台本をあらためて沖繩局で再現し、BS-2で全国放送するので、当時の様子はどうだったかとのこと。早速知る限りのことをお知らせした。

太い柱のあるこのスタジオをどう使うか、最初の小手調べとして「沖繩舞踊」が山口眞さんの解説を交えて始まった。スタジオにはテレビが始まるという高揚感と明るい空気が満ちていた。往時茫々である。

日韓中テレビ制作者フォーラム

韓国・光州大会に参加

主催 日韓中TV制作者フォーラム組織委員会、韓国放送プロデューサー連合会、日本放送人の会、中国TV芸術家協会

期間 十月二十七日(金)～三十日(月)

会場 光州・金大中コンベンションセンター

参加作品

【ドキュメンタリー】「ETV特集・大森林の小さな家」「にんげんどキュメント・老犬クー太18歳」「Nスペ・異常気象・地球シミュレーター」(以上NHK)
「ザ・ノンフィクション・絶滅民族最後の男」(フジテレビ)「素敵な宇宙船地球号」(テレビ朝日)「日経スペシャル・ガイアの夜明け」(テレビ東京)「黒太郎一家の10年」ナベツルと暮らす村・八代」(テレビ新広島)「手く日本最高齢の助産婦」(CBC)「映像06・今を刻んでく若年認知症とともに」(毎日放送)ほか
【ドラマ】「ウメ子」(TBS)「土曜ドラマ・ディロン」(運命の犬)(NHK)ほか
【エンタテイメント】「ネブリーグ」(世界の絶景100選)(以上フジテレビ)「完成!ドリームハウス」(田舎に泊まろう)(以上テレビ東京)
「天才!志村どうぶつ園」(世界一受けたい授業)(以上日本テレビ)「難問解決!」(近所の底力・振り込め詐欺)(NHK)「大改造!劇的ビフォーアフター」(朝日放送)

放送人の会・会員の参加者

大山勝美、河野尚行、山田良明、山田尚、村上雅通、今野勉、松尾羊一、鈴木典之、伊藤雅浩、寒河江正、荻野慶人、石井清司

韓国・中国

放送現場語入門②

前回に続いて中国語は莫さんに、韓国語は金さんに代わって同じ上智大学学生の鄭寿泳(スン・ソヨン)さんに教わった。文中韓は鄭さん、中は莫さんである。

Q 「スタジオ」のことは何と言いますか?
韓 「スタジオ」です。

中 「演播室(ヤンボシ)」です。サブのことは「控制室(コンジシ)」と言います。

韓 韓国では「調整室(ジョジュンシル)」です。マスターは「ジュ・ジョジュンシル」です。

Q 「3・2・1・ハイ!」は?
中 「サン・アル・イー」。カウントダウンのことは「倒計時(ダオジシ)」と言います。

韓 「サン・イー・イー」と「セツ・トウ・ハナ」の2種類です。後の方は日本語の「ミツツ・フタツ・ヒトツ」の教え方です。

Q 美術担当はどうですか?
中 大きく大雑把には「美術師(メイシユシ)」、道具担当は「道具師(ダオジユシ)」、小道具担当は「刷務(ジュウ)」、美工(メイゴン)、「舞美(ウメイ)」とも言います。

韓 こまかい現場の言葉はちよつと分かりませんが、舞台美術は「ムデチャンチ」、道具は「ソドグ」です。

Q 生放送や録画は?
中 「そのまま」生放送(センバンソン)、「録画(ロッカ)」。生放送は「直播(ジボ)」、録画は「録播(ルボ)」です。

Q ギャラは?
韓 「出演料(チュルヨンリョ)」。中 「稿費(ガオフェイ)」です。日本ではクイズ番組の中で正解したタレントに賞金の現金を渡しますが、中国では財務部が扱いますからあんなシーンはありません。

韓 韓国でも賞品は出しますが、賞金はありません。

Q 賞品はスポンサーの提供ですか?
韓 韓国ではテレビの広告は「韓国広告公社(KOBACO)」を全て通すと放送法で定めています。広告主は代社(II広告代理店)を通して自分達の意向を伝え、KOBACOは、全ての番組、時間帯に平均して広告を出すように調整します。

Q 当然広告内容の審査もKOBACOがやるんですね。

中 中国も広告放送が始まった初期は誇大広告が多かったのですが、「最大、最高、最良」などの広告表現は禁止されました、薬やサプリメントの広告規制もきびしくなりました。

韓 KOBACOを通さないと広告は出せないのですが、その目をかい潜って番組の中で広告効果のある表現がされることがないとは言えません。お金儲けのために抜け目のない人はどこにでもいます。

中 中国で株式の売買ができるようになった初期、放送局員の中には、衛星で送られて来て一般には放送されない株価情報

を見て儲けた人もありました。(笑)

Q 人気番組の担当者が音楽プロダクションからお金を受け取ることなどはどこにもあるようですね。人気番組の追っかけはありますか?

韓 あります。あります。日本でも放送された「ごめん、愛してる」は「ミヤナダ・サランハンダ」というのですがこれを略して「ミ・ヤ」その追っかけを「ミヤ・ペイン」と呼びます。「ペイン」がオタクというか夢中になっている人で「廃人」と書くようです。(笑)

中 中国でも人気番組はすぐ略して呼ばれます。お正月の人気番組「春節晚会(チュンジェワンフイ)」は「春晚(チュンワシ)」です。

Q ではまた:
****ソウルドラマアワーズに協力

韓国放送協会(33局)主催で創設されたテレビドラマの国際コンクールについて放送人の会へ協力の要請があり、会は各局への参加を呼びかけたが、日本から参加作品では草薙剛主演「海峡を渡るバイオリン」(フジテレビ)が短編作品(II単発番組)部門の最優秀賞を受賞。「世界の中心で、愛を叫ぶ」(TBS)がミニシリーズ(II連ドラ)部門の優秀賞を受賞した。岩代太郎氏は最優秀音楽監督賞、石丸彰彦氏は最優秀演出監督賞を受賞した。

「海峡を渡る」は日韓共同制作ではない、日本単独制作のドラマとして初めて韓国で放送される。

わたしの発言

地方局会員を増やそう！

札幌テレビ東京支社専任局長

林 健嗣

東京転勤6ヶ月。長期の東京暮らしは学生時代を含め、3度目のことだ。単純だが、その度に肝に銘ずることがある。(地域を忘れない)ということだ。ミーハーなゆえに、何かを見失うのではという思いが、そうさせるのか。新首相になった安倍晋三氏が、お国帰りするのは選挙以外は減多にないと聞く。また、東京育ちの2世議員は地域の現実と疎い、と言う派閥の長の言葉が気になってしょうがない。

「地域」が蔑ろにされるのは、いまにはしまったことではないが「地域」を知らずに何が「国政」だ、と思うのは、田舎者の青臭い遠吠えだろう。

放送のデジタル化制作は、全国どの地域でもあと5年後には「完全整備」しなければならない。その前倒し政策を理由に、難視聴地区を抱える放送局には、公的支援が検討されている。それでもデジタル投資の負担は、放送局に重くのしかかっている。そして放送の現場にも大きな影響を及ぼしている。特に地方局はデジタル投資負担に加え、テレビ広告収入の減少や地域格差の拡大で汲々としている。

アメリカのあるマーケティング専門家は、「広告費減少」が「製作費引き下げ」をまねき、「番組の質低下」を

誘引し、それが「視聴者離れ、減少」を誘い、TVメディアの悪循環はTV CM崩壊をきたす、と指摘していた。

そうしたマルチメディア時代の兆候が、日本にも現れ始めていると聞く。

デジタル化は、放送の「企業性」を剥き出しにし、「公共性」や「放送の役割」を、いまさらのように問いかけている。過去に経験したことのない苛酷な時代を前に、地域の制作者は、その視座を失わず、発信し続けようとしているのは、頼もしい限りだ。

大山勝美氏は、地方局！地域社会に根づいた放送メディアがなければ日本の放送文化はない、と語っている。また、村木良彦氏は、「地方」からしか「文化」は生まれないと書いている。

放送の果たすべき役割を示唆した発言であり、いま繰り返し確認すべきことだと思ふ。地域は、この国の個性であり文化であるはずだ。人も方言も、地域性も、それ自体が文化であることは誰もが認めているはずだ。

デジタル時代にこそ、放送がかげがないのないメディアであり、多くの人々に信頼されるメディアとして制作現場に身をおく放送人は、いまこそ垣根を越えて、連帯しなければならない時が来ている。地域にこだわり、現役の制作者にこだわって、会員を増やし放送人の会ネットワークをつくり、多様な問題をかかえる地域の放送人へ、先輩会員の方々から熱いエールを送り合おう、そんな「場」を作ってみてはどうだろうか、と今考えています。

単純にいえば、放送人の会HPに「地域の放送人の会」会員をはじめとする若い現役の制作者が、お互いの制作番組を持ち寄り、視聴し、情報交換

する(「広場」のようなWeb上のカフェを、立ち上げられないか、ということ)です。

40歳から50歳台の現役放送人のなかには放送をきっかけとして、新しい放送活動に取り組む人たちがいます。

放送人の会ホームページ上に地域会員が中心となり、会員非会員を問わず自由に参加できる、放送人SNSのようなものをとりあえず立ち上げられないか、と考えます。

放送人の会の諸先輩方、若い地域会員の勧誘に力をお貸しください。

「地方の時代 映像祭」 入賞作品決まる！

第26回06「地方の時代」映像祭

10月7日(土) 13:00~17:00

会場 川越市 東京国際大学

受賞作の上映および講評 制作者

参加のシンポジウム、贈賞式

・グランプリ NHKスペシャル

「ひとり 団地の一室で」

・優秀賞 「一億人の富士山スペシャル

晴」(山梨放送)「消える産声」産科

病棟で何が起きているのか」(中京

テレビ)「イナサウ風と向き合う

集落の四季」(NHK仙台)「ド

キュメント06カナ リアの子供たち

(日本テレビ)SBSスペシャル

「散華」ある朝鮮人学徒兵の死」

(静岡放送)

特別賞「広島、長崎を伝えたい」

ある市民ジャーナリストの軌跡」

(長崎放送)ほか市民・自治体・C

ATV部門、高校生部門など各賞。

☆会員の皆様の「参加を期待します

コラム

人びとがテレビを見るまっかけは何

だろう。テレビの接触動機を分類した古いデータがあった(「調査情報」)

・新聞ラ・テ欄を読んで(高学歴サラリーマンと定年層)

・テレビの自社番組予告を見てから(専業主婦)

・テレビ雑誌を読んで選ぶ(家事手伝いと専業主婦)

・クラスや職場の評判が気になって(女子学生とOL層)

・漫然とテレビをつける(OL層と老人層)

・一局集中習慣化視聴(NHKファンの高齢老人層)と出た(順不同)

◆リモコン式受像機が行き渡ってからのデータだが、会員諸君世代が現役の頃は、ほとんどの受像機はまだ回転式だったからブラウン管の前でいちいち画面を見つめて局選択につとめたもの

◆山本明教授(故人)はその際、お目当てのチャンネルでない局が横切る数秒間チラッと見て「ほう、これは面白そうだ」と他局を楽しんでしまうと。

教授は「浮気型視聴」と名付けて「テレビはウワキに限る」とからかった。

◆「地デジ」時代になると案外、こんなウワキ視聴がものをいうのではないで

しょうか。今のテレビは「本妻」だがメディア多様化で「愛人」型テレビが

視聴質を競うのも面白って。なにせ正妻相手だと世間が狭くなる。こりゃ

また失言でした(M)

会員名簿 06・9・26現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫 (い)
 石井清司 石井ふく子 石井彰
 石高健次 石橋冠 磯野恭子
 磯村健二 市岡康子 一色伸夫
 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏
 岩下恒夫 (う) 上田千秋 碓井広義
 歌田勝彦 宇野昭 浦田彰 (え)
 江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大野木直之 大西康司 大西文一郎
 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 沖野暁 荻野慶人 小田昭太郎
 小田久栄門 (か) 加賀美幸子
 各務孝 片岡敬司 片島紀男
 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
 河合 肇 川口和久 川口健一
 川口幹夫 川竹和夫 川平朝清
 河邑厚徳 河村正一 (き) 岸田功
 北川泰三 北川信 北出晃
 北村美憲 北村充史 木村栄文
 木村成忠 木元教子 (く) 楠美昌
 工藤英博 (こ) 小池勝次郎
 河野尚行 児玉久男 児玉孝光
 後藤和晃 小中陽太郎 近藤晋
 今野勉 (さ) 斎藤伸久 齋藤守慶
 齋藤秀夫 齋明寺以玖子
 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江
 桜井均 桜井元雄 迫田朋子
 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤年
 佐藤利明 沢口真生 澤田隆治
 沢田隆三
 (し) 重延浩 静永純一 渋谷康生
 嶋田親一 清水満 下川靖夫
 下重暎子 習田豊 城菊子
 (す) 菅野高至 杉澤陽太郎
 杉田成道 鈴木克明 鈴木昭典
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之
 須磨章 せんぼんよしこ
 (そ) 曾根英二 (た) 高島秀之
 高橋一郎 高橋啓 高橋泰 滝大作
 武谷雅博 田澤正稔 只野哲
 田中昭男 田原英二 田原茂行
 (ち) 千葉勉
 (こ) 露木茂 鶴橋康夫
 (と) 土居原作郎 戸田桂太
 外崎宏司 富永卓二 土門正夫
 (な) 中崎清栄 中澤忠正
 中島僚 中田美知子 中谷英世
 中津川輝夫 長沼士朗 中村敦夫
 中村克史 中村季恵 中村耕治
 中村美美子 難波秀哉
 (に) 西川章 新村もとを
 西ヶ谷秀夫 丹羽美之 (の) 野崎茂
 野田宏一郎 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋口義春 橋本潔
 林勝彦 林健嗣 林裕史 原由美子
 原田庸之助 (ひ) 備前島文夫
 久野浩平 一杉丈夫 (ふ) 深町幸男
 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子
 藤代勝博 藤田晋也 藤久ミネ
 (ほ) 星田良子 堀川とんこう
 (ま) 松尾羊一 松田輝雄
 松平定知 松前洋一 松本明
 松本修 松本国昭
 (み) 三上義智 三国章 水上毅
 水野憲一 満島保夫 三村景一
 三村千鶴 宮川鏡一 宮脇敏雄
 明神正
 (む) 村上光一 村上憲男
 村上雅通 村上佑二 村木良彦
 村田享
 (め) 銘苅栄昌 (も) 諸橋毅一
 (や) 八木康夫 矢島良彰
 藪内広之 山果昭彦 山崎隆保
 山崎裕 山路家子 山田良明
 山田尚 大和定次 山名光紀
 山根基世 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲 (よ) 横沢彪
 横山英治 吉永善子 吉村直樹
 吉村誠 吉村光夫
 (わ) 和田智允

編集後記

「テレビでは言えないことが多い」TB
 BSラジオのニュースリリースで久米
 宏が述懐していた。え？言いたい放題
 だったじゃやないの？もしかすると
 天皇制、〇〇学会、同和関連など厄
 介なテーマのこと？◆ラジオの話題は
 「久米宏 リターンズTBS！」で永
 六輔↓久米の豪華リレー。裏がみのも
 んた(QR)だから土曜日のラジオが
 久しぶりに面白い◆さっきの久米発言
 だけど、テレビってタブーもあるけ
 ど、そうじゃなくて自分の内面のこと
 でしょうか。無機質なスタジオに独
 り、マイクを通して聴取者に語りかけ
 る構図は、確かにテレビと違う体温
 (ホンネ)が求められます◆ラジオ出
 身の久米は身に染みてそれを知ってい
 るはず。この際「久米ラジオ」で停滞
 気味のラジオを引っ掻きまわしてくれ
 や◆隔月幹事会はテレビマン・ユニオ
 ンのご厚意で広い会議室を利用して
 戴いておりますが、先般、今野勉代表
 以下各事業、プロジェクト関連の肝入
 りも決まりました。そこで担当者の皆
 さんの運営方針をめぐる揃い踏み特集
 としました◆なるべく会員の皆様に
 「会」の動向が手に取るように解る
 「会報」をめざすこと、それが編集の
 新方針であります。ご意見、ご批判、
 提案、三十一文字、自己PR、新会員
 の紹介などぜひメール or FAX
 でお寄せください。紙面に反映させて
 いただきます。(M)